

⑤ ナギーブ・マフフーズ 著、埴治夫 訳

『張り出し窓の街』(カイロ三部作 1)

(国書刊行会)

2010年暮れから2011年にかけて、アラブ地域で民主化運動がまたたく間に広がり、30年近く続いたエジプトのムバラク政権もあっけなく幕を閉じました。エジプトは、1919年(イギリスからの独立)と1952年(王政打倒のクーデター)にも革命を体験しています。

三部作の第一部である本書は、第一次大戦中の1917年から独立に揺れる1919年までのカイロが舞台です。民衆のデモが描かれている部分は、現代のニュース映像とクロスします。カイロの商人一家三代の人間群像がエジプトの現代史とともに書き綴られる三部作です。

929.763 ||Mah (N.T.)

⑦ 佐藤 清隆・古谷野 哲夫 著

『カカオとチョコレートのサイエンス・ロマン：神の食べ物の不思議』

(幸書房)

チョコレートといえばおなじみの甘みと苦みが口中に広がるお菓子ですが、カカオの木の学名は「神の食べ物」といわれています。なぜこのような学名が与えられたのか?生のカカオ豆が渋くて食べられないのになぜチョコレートの味が生まれたのか?など多くの不思議な疑問に、本書では、カカオからチョコレートになるまでの過程を長い歴史を振り返りながら、サイエンスを交えて解説しています。大自然の進化と人間のさまざまな営みから生まれたこのお菓子里に奥の深さを感じられるのではないのでしょうか。

617.3 ||Sat (M.T.)



⑥ 川合章子 著

『ダイジェストでわかる 外国人が見た幕末ニッポン』

(講談社)

幕末動乱期、鎖国をしていた「ニッポン」にやって来た23人の外国人たちの日本滞在記です。「ニッポン文化」と「ニッポン人」に相対したときの驚きと発見、「異文化交流」で生じた可笑しく時にはしんみりするエピソードが満載です。彼らは文化の違いに戸惑い苛立ちながら、一方で日本文化の独自性、日本人の知性と礼節を高く評価し、知れば知るほど日本が好きになり、西洋文明を日本に持ち込んでよいものかと自問さえるのです。

こうした外国人の目を通して語られた幕末ニッポンのなかに、「高潔、正直に一生懸命」に生きた私たちのご先祖様の姿がよみがえってきます。

210.58 ||Kaw (Y.S.)

⑧ 野口朋隆 著

『江戸大名の本家と分家』

(吉川弘文館)

家の存続が重要な江戸社会では、養子を認め家督を相続し、本家が存続できない場合は分家の存続により家名や血統を連続させてきました。本家は分家を支配するという考えが一般的ですが、本家は将軍の「家臣」である分家に遠慮しながらも本家を上位者、分家を下位者と認識しなければ地縁的・血縁的に分離する可能性を孕む政治的な関係でした。

本書は、家ごとに関係性が多様な本分家が、双方の思惑の中で、家の連続という目的を共有しつつ存続してきたことを明らかにしています。

210.5 ||Nog (A.U.)